
【コラボ侍】ざこのうた

カルファール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【コラボ侍】ざこのうた

【Nコード】

N6574P

【作者名】

カルファール

【あらすじ】

『みてみん』で参加させていただいている、コラボ侍のこぼれ話おそらく、詳細を知らなくても理解できるようになっているはずです（作者の腕がなかったらごめんなさい）。

赤い狐と緑の狸、京風薄味仕上げ。

一部マンガっぽくしてあるので、携帯からだ読みにくいかもしれません。

死にネタ注意。

(コラボ侍の詳細 早村友裕さんのブログ<http://19.mitemin.net/userpageblog/view/blogkey/1787/>)

(前書き)

> i 1 5 5 1 8 — 5 0 9 <

クラブ侍に参加させていただいた早村友裕さま、そして素敵に参加
者さま方へ^^

せわしなく吐き出される熱い呼吸は、いつまでも冷める気配を見せなかった。

まるで、肺が燃えちまっているように、必死で酸素を求め、胸にこもる熱気を外に逃がそうとしている。

視界には、空しかない。

灰色で、重苦しく俺たちに覆いかぶさっている。

背中に湿った土を感じながら、俺は寒々とした荒野に身体を投げ出していた。

もう、動けそうにない。

激しく上下する胸が、地表でなすすべなく呼吸を続ける魚のようで、自分でも可笑しくなってきた。

——結局、俺たちは雑魚ってわけだ。

> i 1 5 6 5 4 — 5 0 9 <

「ひ、緋狐お……」

サラサラと耳をくすぐる野芝のむこうから、声が這ってきた。

そいつは、少し離れたところで大の字に伸びている化け狸、狸休の肺から絞り出された声だ。

ふいごのようになった俺の肺とは違って、やつの肺は、ドロドロ

の何かに絡め取られたように、せいぜいと重く上下している。
やつも、たぶん、動けない。

「あ」

俺はどうにか答えた。

思った以上に掠れた声は、灰色の空に吸われていった。

「負けたなあ」

狸休は、どこか満足そうに言った。

「おう」

あつさりと認めた俺の返事に、ひひひと苦しげに笑う。

「お前で敵わん相手やもんなあ……俺が敵うわけないやんかあ……」
「だな」

「ガキのくせに、えらい強いやつちゃ」

「ああ」

相変わらずおしゃべりな野郎だ。

黙っていれば、いつか、傷だって癒えるかもしれないのに。

俺たちを負かした相手のことは、名前も素性も知らなかった。

「殺してもよい相手」だと頭が言ってたから、襲った。

鬼だとか、賊だとか、政府だとか——俺には何のことだかさっぱりわからない。

わかるうとも、思っちゃいけないけれども。

「なあ、緋狐お」

「あまりしゃべるな」

俺は、閉じそうになるまぶたと戦いながら、邪険に言った。
眠い。

このまま眠ったら、傷は治るのか、それとも、一生目覚めなくな

つまうのか、どっちだろうか。

いずれにせよ、口を動かすことすら億劫になってきやがった。

「初めて、会ったときのこと、覚えてる？」

「……だったら何だ」

「懐かしいなあ」

「もう黙れ。いい加減に——」

「お願いや、緋狐」

俺の言葉を遮ると、狸休は、ドキリとするくらい冷静な声で言った。

「もう、黙ってたかで、助からへんやんか……」

「ばかやろう」

助かるかもしれねえじゃねえか。

そう言おうとする俺は、よほど往生際が悪い。

それでも、早々に諦めつまうようなやつよりマシだ、と思う。いつもそうだ、昔から。

「なあ、黙らんといて、緋狐」

なあ、なあとうわごとのように続ける狸休は、甘えるような声の裏に、寂しげな震えを隠していた。

「なあて。お願いやし……独りぼっちは、嫌や……」

「俺、狸休」

毛艶のいいその狸は、左足に鎖が食らいついている事実すら気づいていないような、間抜けな表情で言った。

「そっちは、なんちゅうの？」

野生育ちの俺は、その狸を、人間のガキを見るような目で睨みつけていた。

なんて緊張感のない野郎だ。

俺がこんなふうに関をキラキラさせるのは、事切れた獲物を目の前に、いざ食事を始めんとするときくらいだつてのに、この狸ときたら。

「やつと仲間が出来て、うれしいねん」ときた。

「意味わかんねえな」

と、俺がすげない第一声を放つと、そいつはいつそう嬉しそうだった。

その時の俺が、なぜかほっとしていたのは、四足を束ねて自由を奪っていた縄が解かれたからという、それだけの理由ではなかったのかもしれない。

霧立ちこめる白伏^{はくふ}の靈山——。

はじめの悲鳴が上がったとき、俺は一人、河原にいた。

山が雄たけびを上げ、襲ってきたのかと思った。

襲ってきたのは、人間だった。

多くの狐が死に、わずかな狐は逃げ去り。

そして俺だけが、無様にも逃げそびれ、死にそびれた。

——妖狐は高く売れる。

猟師はそういつて、俺に縄をかけた。

買われた先は、どこかの街の、どこかの屋敷。

屋敷の主人はよく肥った男だったが、もはや顔も、臭いすらも覚えちゃいない。

閉じ込められた四畳半の先客は、だるまみたいにろころした狸だった。

なんでも狸休というんだと。

「ちよつと前に、引き取られてきたんや。ここに来る前は、呉服問屋で招き猫やっててん」

「はあ？」

なんで狸のくせに猫やってんだよ。

俺は、お前の過去なんか興味ねえよ、というように、馬鹿でかいあくびをしてやった。

「くあー……はいはい。それで、ごふくどんやってなんだ」

そんな調子で、狸休と話していると、いつもやつのペースに巻き込まれた。

狸休は生まれたときから人間に飼われていて、服や布を売る御店で、草色の座布団に座っていたそうだと。

それで飯が食えるし、寝込みを襲われることもないってんだから、良い御身分じゃねえか。

「けどな、よおしてもらた旦那さん、亡うなっつてもてん。若旦那は、俺のことそない好きちごてんやるなあ」

そして、狸休はこの屋敷の主人に譲られた。

それが二日ほど前のこと。

ここの主人は、変わった生き物を集めるのが趣味だというのが、それにしても俺とこいつしかいないというのは妙な話だ。

「俺が来てすぐは、ごっつい山猫もおってんで」

今は、主人に連れられてお散歩みたいけどな、と、狸休は暢気に言う。

——なるほどな。

地下壕から血の臭いがぷんぷんしゃがる。

この屋敷は、イカれてんだ。

「どうせ、暴れたかて、この鎖ははずせへんで」

俺がいよいよここを出ると言ったとき、狸休は首を振って言った。

「それやったら、大人しゅうして、美味いもん食ってたほうが幸せ

とちゃう？　そもそも飼い主に殺されるやなんて、そんなこと……」

「けっ」

これだから、能天気野郎は。

仲間の血の臭いすら嗅ぎ分けられない、哀れなやつだ。

俺は鎖が許す限り高く跳ね、宙返りをする。

畳を踏んだときには、人間の姿になっていた。

だが、耳と尾——化け損じ。

ちえっ。

やはり、俺は妖術の才能がないらしい。

だが、この際美しさなんてどうでもいい。

誰かが認めようと、馬鹿にしようと、ようはここから逃げ出しゃ

いいんだ。

獣用の錠枷が足首に食い込み、皮膚を切って血をにじませたが、俺は鎖の元をたどり、打ち付けられた杭を引き抜いた。

「ここにいたほうが幸せってんなら——」
一生ここにいやがれ。

そう捨て台詞を吐こうと振り返ると、狸休は驚いたように四本足で立ち、口をぽかんとさせて、俺に見入っていた。
さらにいつそう、目を輝かせて。

「すごいやんかぁ！」

「寂しかったんや」

昔を振り返る狸休の声は、独り言のようになっていった。

「生まれたときから、ずうっと誰かがいてくれたさかい。独りぼっちなんて、耐えられへんねん」

「甘ったれたやつだよ、お前はさ」

俺が思ったことをそのまま口にしても、「そうやで」と、やつは開き直るばかりだ。

「けどなあ？ これでも、強なったんやで」
そうかい。

「あつたかい膝とか、やらかい布団とか、失おてしもたもんも多いけどなあ。昔を思たら、未練たらたらやけどなあ」

俺は思わず、ふっと笑ってしまった。

「まったくだ」

狸休も笑い出した。

二人してひとしきり笑うと、狸休は、止まりかけたオルゴールみたいに、ようやく言った。

「緋狐。お前とおったから、……俺は強おなった」

狸休にせがまれ、俺はやつに化け術を教えた。

息の潜め方も、音を立てない歩き方も、敵の急所も。

俺が狸休を強くした、確かにそうかもしれない。

——けれども。

本当に、お前は戦いたかったのか？

強くなりたかったのかよ？

「なあ狸休。お前、——」

> i 1 5 6 4 6 — 5 0 9 <

寂しがり屋の狸休は、よくしゃべり、よく笑い、俺の傍らで眠る。
「だって寂しいんやもん」と、口癖のように言い訳をしながら。

俺は、そんな狸休をつるさいやつだと思いながらも、やつとしゃべり、ともに笑い、隣で眠った。

化けるのが下手で、いつも独り河原にいた俺。

変化した姿を水面に映して、人知れず修行を続けた日々。

人間の手を逃れて山に戻り、散り散りになった一族を見つけることが出来なかった、あのときの孤独。

「俺も、寂しかったんだ——」

——ひこ。

——ひこ？　へえ、かつこええ名前やな。どんな漢字？

——知るかよ。……ただ、こう言ってた。“狐にあらず”……そんな意味があるんだとよ。

——狐に非^{あら}ず？　狐やのに、そらおかしいなあ。

——だあら、俺が知るかよ！

> i 1 5 6 5 5 — 5 0 9 <

——お前、字書けるのか？

――ふはひ、ほひえへもーはんは。

――あ？

――ほれ、見てみ見てみ。非狐。これがお前の漢字や。

――ふうん。

――でも、お前は狐やし、こら間違ってるさかい……ほは、ほへへひいは。

――何だこれ。

――これでも、ちゃあんと“ひこ”て読むんや。こっちのほづが、絶対かつこええ。

> i 1 5 6 4 9 | 5 0 9 <

> i 1 5 6 5 0 | 5 0 9 <

> i 1 5 6 5 1 | 5 0 9 <

たとえもう戻ることが出来なくとも、決して失うことはない。
お前の葉っぱが皮膚を刺すことなく、俺の尻尾が骨を砕くことの
なかった、遠い日々。

おわり

> i 1 5 5 7 5 — 5 0 9 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6574p/>

【コラボ侍】ざこのうた

2011年10月5日01時16分発行